

## 歌論・連歌論の「さび」

中 島 洋 一

文芸理論としての「さび」なる理念は焦風俳論に於て完成したものであり、その美的世界に就ては既に多くの先学によつて究明されてゐる所である。然るにその焦風俳論の「さび」に至る迄の歌論、並びに連歌論に見られる「さび」の理念に就ては、俊成のそれ以外は余り論述されて居ない故に本稿ではそれらに就て考察し度い。

「さび」なる理念は歌論に於て先づその成立を認め得ると云へよう。即ち俊成の歌合判詞になる嘉応二年十月の住吉社歌合に於てその最も早い用例を見る事が出来る。用語上で云へば「神さぶ」「おきなさぶ」「をとめさぶ」等は更に此の先駆とも考へられ、又美的内容に關しては「さぶし」「さびし」等の世界に近い事も指摘されてゐるが、文芸理論としての「さび」の明確な用例、並びにその美的世界の成立は俊成に始まると言つてよいであらう。俊成が「さび」と判した用例は

歌論・連歌論の「さび」

- (1) 住吉の松吹風の音たえてうらさひしくもすめる月かな<sup>(1)</sup>  
すかた言葉いひしりて。さひてこそ見え侍れ
- (2) 武庫の海をなきたる朝にみわたせは眉も乱れぬあはの嶋山<sup>(2)</sup>  
左詞をいたはらすしてまたさひたる姿。ひとつの躰に侍るめり。  
ね覚してものそ悲しき昔見し人はこの世にあるそすくなき<sup>(3)</sup>
- (3) 右歌はすかたさひて心ほそく
- (4) 声の葉も霜かれにけり難波かた玉もかり舟行かよふ見ゆ<sup>(4)</sup>  
霜かれにけりなにはかたなと。珍しからぬ事なれと。さひても侍れは<sup>(5)</sup>  
見渡せは沖の塩ちに雲とちて空か海かとわきそかねつる
- (5) 左はこと葉ふり姿さひて。よろしき歌<sup>(6)</sup>  
ふりそむるけさたに人のまたれつる深山の里の雪の夕暮<sup>(6)</sup>  
雪の夕くれ。少しさひて思ひやられ侍れは
- (6) 長月の月のあり明のかけふけてすそのゝ原にをしか鳴也<sup>(7)</sup>  
すそのゝはらといへる。心ふかくして。姿さひたり
- (7) 春夜さむに秋のなるまゝによはるか声の遠さかり行<sup>(8)</sup>  
松にはふまさはかつらちりにけりと山の秋は風すさふらん<sup>(8)</sup>  
左、右ともに。すかたさひ。詞おかしく聞え侍り
- (8) 昔おもふ高津の宮のあとふりて難波の芦にかよふ松風<sup>(9)</sup>  
難波のあしにかよふ松風。ことにさひてきこゆ
- (9) 春風は吹くと聞けども柴の屋はなほさむしろにいこそねられね<sup>(10)</sup>  
右の柴の屋、さびては聞え侍るを
- (10) ほのかなる霞の末の荒小田に蛙も春の暮怨むなり<sup>(11)</sup>  
霞の末の荒小田はさびてこそは見え侍れ。

(12) うつの山夕越え来れば霽降り袖ほしかねつあはれ此の旅<sup>(13)</sup>

左、袖ほしかねつあはれ此の旅などいへる、さびては聞え侍るを

(13) たどりつる道に今宵は更けにけり杉の梢に有明の月<sup>(14)</sup>

有明の月の殊にさびてまさとや申すべきを……

等であるが、此の俊成の「さび」の世界に就て論ぜられた主な説を見る時、岡崎教授は「俊成のこの『さびたる姿』とは歌詞がやや古風で落着きがあり、静かな深い感じを与へるやうな場合に言つてゐるやうである」<sup>(14)</sup>と述べられ、頼原教授も「表現が古風で落ちつきのある事をさしたものでらしい」<sup>(15)</sup>と述べて居られる。尤も頼原教授は更に続けて「まだ全体の情趣に關してさびがあると言つたやうな例は見られないのである」<sup>(16)</sup>とも述べて居られるが、岡崎教授は此の点に就ては「俊成は『姿』を『さびて』と云ふ風に言ふ事が多かつたから、これらは多少内容となつてゐる題の物のさびしさも關係はしてゐるにしても、やはり歌調や全体の気分といふやうな点が多く關係を持つもののやうである。」として居られる。俊成の歌合判詞中に於ける姿の概念は俳論に於ける程明確なものではなく、例へば藤原良經の「鳴く蟬のはにおく露に秋かけて木蔭涼しき夕暮の声」<sup>(17)</sup>に対して、六百番歌合では「はにおく露に秋かけてなどいへる姿、詞殊に艶にをかしく侍哉」<sup>(18)</sup>と判し、後京極殿御自歌合では「又羽におく露に秋かけてといへる心。ことに艶に聞えて」<sup>(19)</sup>と述べて居る如き例も存するのである。唯而し此の「さび」の場合は「心さび」とした用例はなく「細し」の場合には逆に「心細し」のみで「姿細し」の如き用例は見当たらない点を考へて見る時、他の美的理念に比較してこれらにはそれぞれの特性が強く見られるとは云へよう。とは云へ先に挙げた例歌を見る時頼原教授の如くには尚云ひ切つてしまえぬものが存するのであり、俊成に於てもやはり一首全体の情趣にも「さび」を認めて居たと云ひ得るのである。「さび」の持つ特性として両者の共に認めた古風な表現は、例(5)に見える「こと葉ふり、姿さびて」に暗示されてゐるとも云へる

が、今それを表現の平明さに関係させ、又「落ちつき」とか「静かに深い感じ」とかを情趣が深く沈潜せられ、主情的よりも叙景的である点に關係するものとすれば、釘本氏の例(1)・(2)を挙げての「さび」が「無技巧的相貌を帯ぶるまでに至つてゐる技巧の高き成就を表白することに主点があつた」とか「寂びたる姿」に於ける内容は感情のねばりを脱し、『たけ高く』『きよげ』な美を徴表とするものであるが、その中心的性格として、私達はあくまでも客観的な表現態度を見出すことが出来る」の説等はそれを一層精密に論述したものと云ふ事が出来やう。確にこの説は秀れたものであり、一步深め得たものであるが、これに對して更に実方教授は例(3)等を挙げて、「客観的世界の中にみられる静寂さがこの『さび』の中心内容をなして居るけれども、俊成に於ける『さび』には主観的色彩がみられ『あはれ』を含む場合には多く『さび』と云はれて居るやうである。」<sup>(4)</sup>とも云はれ、「それは主観と客観との融合の中に見出される幽微静寂の境地に於て形成される歌の美的様相こそこの『さびたる姿』である」と論じられてゐる。この他例(2)の歌が同時に「幽玄」とされてゐる事、又例(3)及び(4)の歌が同時に心ほそくとされてゐる事によつて、「さび」とこれら「幽玄」並びに「心ほそく」との關係も亦既に論ぜられてゐる所である。

これらの先学の諸説を基にして俊成の「さび」の本質に就て今少し考察してみよう。俊成は一首全体の情趣並びにその姿に就ても「さび」を認めてゐるが、同時に一首の中でも特にある部分を指して「さび」と判してゐる場合も少くない。今俊成の「さび」の本質の考察に當つて、先づその特に明確にされた部分を通して考へ度い。即ちそれは、(4)の「霜かれにけり難波かた」(6)の「雪の夕くれ」(7)の「すその、原」(9)の「難波のあしにかよふ松風」(10)の「柴の屋」(11)の「霞の末の荒小田」(12)の「袖ほしかねつあはれ此の旅」(13)の「有明の月」の句に殊に「さび」の世界を認めてゐるのである。これらの語を並べて見ても、それらが華麗さとはうらはらの静寂にして・あはれに・ものさびしいものである事は理解されるが、殊に例(6)の判詞に「雪の夕くれ、少しさひて思ひやられ侍れは」とある如く、それらの

世界を心の内に深く思ひやると云ふ発想を取つて見る時、それらの語句は極めて深い想ひの世界へと誘ふのであり、それは現実的な情景を超えて、深々とした情趣・漂泊とした永遠の世界に通ふ郷愁をさへ感じさせて来るのである。例へばこの(6)の歌は全体としては尚人間的なあはれの感情の色濃く残つてゐるものであり、俊成も「少しさひて思ひやられ待れば」の如く、これらの用例の中では、「さび」の世界の最も薄いものとも考へられ、先学の用例中にも殆ど使用されてゐないものであるが、而、俊成の指摘した「雪の夕くれ」の言葉はそのやうな、主情的なあまやかされたあはれさの世界を打消し、詠者の置かれた冷く厳しい現実に立帰らせ、且つ其処に止まるのみでなく、それを通して人生の持つ根元的な淋しさ、あはれさの世界に心を染み入らせるものがあるのである。この例に対して「ことにさひてきこゆ」と判された(9)の用例を見る時、それはたゞ蕭々と難波の岸にかよふ松風の音を聞きつつも、心は遠い古の宮と淋しい現実との間を吹き通ふのであり、其処に現実を超え、無限に拡がる人生のあはれさ、否、人間をも含めた自然の、全世界そのものの中に持つ深い根元的あはれさの情趣が深く詠者の心に漂つて来るのを感じするのである。これは又例(12)の「袖ほしかねつあはれ此の旅」と自己の姿をふつとふり返つた時、更に其処に自己のみならず人間の生のあはれさ、淋しさの思ひに身が染むのであり、それは他の「霜かれにけり難波かた」「柴の屋」「霞の末の荒小田」有明の月を通して同じことが云へるであらう。殊に一首全体の上に見られる例(1)、及び(2)の「さび」たる世界は、それらが単なる叙景歌の如くでありつつも、決して単なる写景に終つてしまふのではない。

住吉の松吹風の音も絶えて、唯うらさびしく澄める月は、又武庫の海のなぎたる朝にみわたされる眉も乱れぬあはの嶋山の景は、現実の景であると同時に、絶えず変化流転のみを続ける乱れたはかない中世の時代、高貴な家系に育ちながら、武家階級の抬頭に急速に没落しつつある公家の矛盾と苦悩に満ちた現実にあつて、唯一つの変ることのない永遠に通じる景であり、其に感得されるさびしさともあはれさとも明示出来ぬ縹緲とし、又茫漠とした情趣は確に静

寂な永遠の郷愁を感じさせるものではなかつたらうか。主情性の特に色濃く見られる例(3)の歌に於ても、それは単に現実の人間のあはれさ、淋しさの情趣のみではなく、自己をも含めた人間存在の姿をふり返つて感得される無限のあはれさ、淋しさの情趣の漂ふ世界に他ならないのである。斯くの如くして「さび」は単なる客観的写景や或は単なる現実的あはれさ、淋しさの情に意味があるのではなく、もつと深くそれら両者が融合し、更にそれがより深く人間の生そのもの、全世界の根底に潜むあはれさ、淋しさの情趣の漂ふものであり、尚又、更には其処に永遠性に通じる淋しさ、静寂さの中に見られる魂の郷愁の感得される縹緲とした心の流れ、情趣の姿が、「さび」の本質であると云へよう。従つて「さび」は現実的なもの、華やかなもの、きらびやかなものを通しては「さび」の境地には入り難い。つまり、それらは現世に密着し、へばりついたものであるからである。従つて俊成の「さび」はその題材を見ても「社頭月」「海上眺望」「述懷」等によく見られるのであり、又詞に於ても先に引用した如く、現実世界の行き詰り的な、或はそれが永遠的相貌を持つたものであつて、其の永遠的なものと、現世的なものとの接点乃至は飛躍台が其処に見られるのである。又「さび」は此の様に「幽玄」に通じる縹緲性をもつのであるが、それは単なる幽かさではなく、人の魂の底に触れるごとき人間存在としてのさびさ乃至は永遠的なもの、或は、郷愁への志向を持つた縹緲性である所に特色を持つのである。而、俊成に於けるそれは尚深く反省せられ、意識的に究明され掘下げられたものではなく、何か自然の一場面、或は現実生活の一瞬に於て感覚的に捉へられたそれである点で心散や芭蕉の「さび」とは異なるが、しかし目標とした所は同質的なものと云へるのである。又先述の例によつても理解される如く、かかる「さび」の用例が六百番歌合の頃までであり、それ以後は殆ど見られぬのは、当時の歌壇の急速な展開を思はせるのであり重要な意義を持つと考へられるのである。

	註(1)	住吉社歌合	社頭月	八番	左歌
(2)		広田社歌合	海上眺望	二番	左歌
(3)	〃		述懐	十三番	右歌
(4)	〃		海上眺望	十三番	右歌
(5)	〃		〃	十八番	左歌
(6)		右大臣家歌合	雪	十七番	左歌
(7)		御裳濯川歌合		廿番	左歌
(8)	〃			廿一番	
(9)		慈鎮和尚自歌合	十禪師	十一番	左歌
(10)		六百番歌合	春上 余寒	九番	右歌
(11)	〃		春下 蛙	廿一番	左歌
(12)	〃		冬 鶯	廿四番	左歌
(13)		六百番歌合	恋一 尋恋	廿九番	左歌
(14)		美の伝統	「わび」と「さび」	四	
(15)		俳諧精神の探究	「さび・しをり・細み」		
(16)		六百番歌合	夏 蟬	三十番	左歌
(17)		後京極殿御自歌合		二十四番	右歌
(18)		中世歌論の性格	△寂▽		
(19)		日本文芸理論—風姿論—	△俊成の歌論に於ける風姿▽		

二

歌合判詞に於ての「さび」の用例は俊成の頃の歌評としては、宮川歌合に於ける定家と千五百番歌合に於ける季歌連・論歌論の「わび」

経及び顕昭の判に僅かに見られる程度である。

- (1) 人聞ぬふかき山へのほとゝきす鳴音もいかにさひしかる覧<sup>(1)</sup>  
鳴ねもいかになといへる誠にさひてはきこゆれと
- (2) ほとふれはおなし都のうちにたにも覚束なさは問まほしきを<sup>(2)</sup>  
右姿。さひて。いと哀にも聞え侍るを。
- (3) 夕かけてつまや恋しきかみ島のいそまのうらに千鳥しは鳴<sup>(3)</sup>  
空や海月やこほりとさ夜千鳥雲より浪に声まよふ也
- 左歌かみしまのいそまの浦に千鳥しはなくとさひしく侍れとも右歌の「空や海月や氷とさよ千鳥雲より波にこゑまよふ也」といへる左さひ／＼として右の勝にこそ
- (4) うちらはふおりも有けん床のうらの浪になれたるよはのさ庭<sup>(4)</sup>  
さひたるけしきなれば勝と可申也

これらの例歌によつて見るに俊成の子定家にして僅かに二回、他は一回づつと云ふ少なさであり、「さび」の理念は一人俊成のみが強く持つて居たと考へられるのである。定家の「さび」と判した例(1)及び(2)を見る時、其処に西行の面影が髣髴として伺はれるのであり、或程度の内省的淋しさ、あはれさを含むとも見られるが、而し、やはり俊成の「さび」とは異つて、より表面的・直接的・主情的なあはれさ、淋しさの性格が強い様に思はれる。然も定家に於てはその最初期のこの宮川歌合に見えるもののみで、それ以後には見られないのである。これに対して季経は(3)の例のみであるが、「さびし」とは明確に区別して居り、主情性からはなれた叙景歌の中に冷く澄んだあはれさと、淋しさの情趣の漂ふのを感じ得るものである点は注目し得よう。而し季経の場合その価値は十分に認めてはいるもの。「…といへるさひ／＼として」の如き云ひ方であり、尚、形容的に使用して居り「さび」なる一個の独立した理念として認識するには至つてゐない様に思はれる。一方顕昭の場合は同じくその価値を認めてはゐるが、しかしその内容



は寧ろ荒れ果てたあはれさの情景を指す言葉であつて、その背後に広がる情趣的雰囲氣を指すまでには至つて居らず、唯「さびたるけしきなれば」の如く歌の世界に就てよりも寧ろ素材的な情と景の要因が強く「さび」の縹緲と漂ふ美的世界を認識してゐるとは言ひ難いのである。

此の様な時にあつて、俊成の初期である広田社歌合と同年に成立したかと考へられてゐる歌仙落書に四回もの「さび」の用例を見出すことは相当注目に価する。

清輔朝臣 風体さま／＼なるにや。面白くも又さびたる事も侍り。たけたかきすぢやおくれ侍らむ。霧の絶間より秋の花いろいろに咲きみだれたらむを見わたしたるとや云ふべからむ 〓十首略〓

秋の野を霧の絶間に見渡せば花のいろいろめかれやはする

右馬頭権隆信 風体ひとへにさびたるやうなるべし。若き歌詠の中にありがたくも侍るかな。賀茂の河原の有明さえわたたりたるとやいふべからむ 〓七首略〓

うち渡す賀茂の河原の明がたに哀れをそふる友ちどりかな

寂超法師 風体さびたるさまなるべし。明石のうらの霧がくれに海士の釣舟きえ行くを見るとや云ふべからむ 〓三首略〓

霧がくれ明石のせとを見渡せばかすかになりぬあまの釣舟

大輔 古風をねがひて又さびたるさまなり。住吉の松のけしきふるめかしきあけの玉垣、ところ／＼こばれてみえたとやいふべからむ 〓五首略〓

何となく昔おぼゆるわたりかな松ふくかぜのすみよしの涙

等がその用例であるが、これらに対して岡崎教授は「此処では風体論として『さびたるさま』が認められた。さうしてこれは古風な風体であると見てゐるらしく」の如く述べ、頼原教授は「専ら歌の風体について云つて居るので、当世風に対して古風な歌の姿を評したもの、がすでに歌全体の情趣を評する言葉とも考へられる。」と述べて居られる。<sup>(6)</sup><sup>(7)</sup>しかし既に指摘した如く俊成の「さび」にも歌全体の情趣に就て評したものも存するのであつて、その点で歌仙落書

が価値高いとは言ひ得ないのである。又「古風をねがひて又さびたるさまなり」とある所から、その「さび」の性格に古風さを指摘することは可能であらうが、これに就て更に深く考察しよう。歌仙落書に見られるこれらの用例中、主として「さび」の言葉によつて評した隆信・寂超・大輔のそれは殊に重要であるが、それらに於ける「さび」なる風体の具体的な説明は、いづれも静寂にして淋しい情趣の漂ふ自然の景が中心となつてゐるのであるが、しかし人間的なものを否定した如き冷い自然観照ではなく、其処に尚「哀れをそふる友ちどりかな」と云ひ「かすかになりぬあまの釣舟」と云ひ又「何となく昔おぼゆるわたりかな」の如く、人間的な温かみの十分に見られるものであつた。斯くの如くこれらの説明から或程度まで俊成の「さび」に近い世界も見出すのであるが、しかしそれらの説明の歌によつても、亦例歌によつても、それは今一度深く、人生の存在そのものを内省する如き厳しい態度、力に乏しく、其処に人生としての深い存在論的なあはれさ、或は郷愁を感じさせる迄には至つてゐない様に思はれ、殊に例歌の中には「見せばやなをじまの蟹の袖だにもぬれにぞぬれし色は変らず」の如きものもあつて全体として俊成に比較する時、尚單なるあはれさ、淋しさとしての情緒的な性格が強い様に思はれる。これはこの書が他に明確に「あはれ」の用語を以て批評したものが殆どない事と深く関係する。即ち「あはれ」とも評する世界を「さび」の内に含めてゐる場合も少くない様に思はれる。而し引用の如き説明の部分から、又「若き歌謡の中にありかたくも侍るかな」の如く、其の持つ特性をも含んでゐる点で、或程度まで「さび」の本質を掴んでゐたとは云ひ得るであらう。

此の他当時の「さび」の用例としては西行上人談抄に於ける「さびたる歌」として挙げられた「夕されは門田のいなばおとづれてあしのまろ屋に秋風ぞ吹く」が見えるが、この歌は叙景歌でありつつも單なる自然観照に終らず永遠なる世界を志向する心が、淋しさと静寂さの中にしみじみと感得されるのであつて、俊成の庶幾した「さび」の世界と近似したものであると云へよう。

下つては、先達物語の中に家隆の言葉として

一、故三位入道<sup>俊成</sup>に歌をみせたりしかば、今は御歌おもしろからじはや。風情ないたくあそばしそと申されき。若き人は風情をよみてよみしづめたるがよきなり。大かたは長高くさびたるがめでたし

の一文が見えるのであるが、此処にも「さび」なる世界は、風情を求め過ぎない云はば古風な言葉をいたはらざる、しかも言葉いひしりたる世界である事、並びにそれは風情を深くよみしづめたるものであり、或る面に於て長高き世界と通じ合ふものを持つものである事が暗示されてゐると云へよう。然もかかる「さび」なる世界は俊成より教へられたものである事も聞き出し得るのである。

次いで歌学大系本八雲口伝によれば「すべて少しさびなきやうなるがとはじろくよき歌ときこゆる也」の言葉が見え「さび」と「とはじろし」とを対比して説明されてゐるのであるが、久松潜一教授編の中世歌論集ではそれが、「すべて少しさびしきやうなるがおもしろくて、よき歌ときこゆる也」とあつて、かなり異つて居り文献的調査が必要である。今「遠白し」と「さび」との関係に就て考へて見る時、遠白のもつ壮大さ、偉大さに於ける如き美は「さび」とは対照的なものであるが、一方、その現世的・人間的なものを超えんとし、抜け出ようとする姿勢、並びにその縹緲性、或は非技巧性等の点に於ては両者は相当類似した性格を持つとも云へよう。

この他歌論書に於ける「さび」の用例としては

- (1) 顕昭法師が札　彼歌のひじりが上ははかるべきさかひにや侍るらん。しひて申さば、有心にしてあるはいけるあひだ、死せるさかひ心にふくめて、扱氣力強く体相気高く、けはひさびさえて、ことのやうかすかに、気色の振舞共に若やかならずして、又さすかにやさしく侍るやおよびかたくこそ<sup>(8)</sup>
- (2) 慶運はたけを好、物さびて、ちと古体にかかりてすがた心はたらきて、みゝにたつ様に侍し也<sup>(9)</sup>

(3) 為秀卿これは格別の風体一流の詠歌又あらぬ様に侍りしなり。俊成卿以往の歌こそ本意にてあれ。ちか比の風体は下品也と申しされしにや。古体に物さびきらひこと葉などいふ事もなく、おもふさまによまれしなり<sup>(99)</sup>

等が存する。しかしこれらは(1)では「けはひさびさえて」(2)及び(3)では「物さび」とあるのであつて其処に「さび」の理念が明確に意識されて用ゐられてゐるとは云ひ難い点が存するのであり、殊に(1)の場合、例歌として人麿の「もののふの八十うぢ川の」と赤人の「もししきの大宮人は」を挙げて居るのであつて「さび」なる世界とはかなり異つたものとなつてゐるのである。又、

宝徳・康正の頃並びにそれ以後の歌合に於ても僅かながら「さび」なる判詞を見出す事は出来る。

(1) しかの浦や空に千鳥の声すみて氷にのこるあり明の月

あり明の月もいてその浜風に声すみのほる千とりなく也<sup>(101)</sup>

左右の千鳥。まことに何も声すみたる躰。さひてはきこえ侍るを。

(2) をしなへて庭の籬の霜かれに残るも淋し菊の一本<sup>(102)</sup>

右籬の霜かれに。一本のこれる菊のすがた。誠にさひてきこゆ

(3) そはつたひ岩ほの苔の露ふかみ月ふみわけて行山路哉<sup>(103)</sup>

右の歌。月ふみわけて行やまちな。風体ことからさひて。あはれに侍れは。まゐるといふへきにや。

(1)は宝徳二年、飛鳥井祐雅の判、(3)は年代不明であるが、更に下つて三条西実隆の判になるものである。これらの世界はそれ〴〵異つてはいるが、共通する性格としては、冷く淋しい自然の景が詠ぜられてをり、殊に(1)の例では人間の要素を全く拒否した冷く澄んだ自然の客観描写であつて、俊成の「さび」の如き、叙景歌でありつつも、其処に漂ふ縹緲たる情趣を通して尚永遠的な世界の希求、乃至は郷愁を追ひ求める如き対象の背後に拡がる内省的なる心の影を探ることは出来ないのである。

かうした叙景的な冷く厳しい世界への移向は更に連歌論の「さび」への過程とも考へられよう。

以上の如く歌論に於ける「さび」なる世界を分析して見る時、それは、さびしさ乃至はあはれさとしての性格と、その情緒の縹緲とした乃至は茫漠とした趣を指す性格、そして更に無技巧的な表現と、深くよみしづめたる発想方法等が見出されるのであるが、而し更にそれらの背後にあつて「さび」の最も本質的な性格を決定附ける筈のものは永遠的な世界を希求することによつて、単なるあはれさや淋しさではなく、人生の存在論的なあはれさの世界を感得し、魂の郷愁を求める如き内省的な心の流れのほのかににじみ出る如きものであり、俊成、並びに西行の「さび」なる世界にはそれが見出せると言ひ得るのではなからうか。

註(1)	宮河歌合	二十二番	右歌
(2)	〃	二十七番	右歌
(3)	千五百番歌合	九百六十番	
(4)	〃	千三百十九番	左歌
(5)	久曾神氏の日本歌学大系解題により承安二年とした。		
(6)	美の伝統	△「わび」と「さび」▽	
(7)	俳諧精神の探究	△さび・しおり・細み▽	
(8)	水無瀬の玉藻	日本歌学大系 第三卷	四三五頁
(9)	近來風体	〃 第五卷	一四一頁
(10)	〃	〃	一四二頁
(11)	仙洞歌合 眺千鳥	三十番	群書類従 卷第二百七
(12)	内裏歌合 庭残菊	二番 右歌	〃 卷第二百八
(13)	細川左京大夫自歌合 深山月	十番 右歌	群書類従 卷第二百廿二

三

「さび」の理念は歌論から更に連歌論へと受継がれて居り、それを説いたのは心敬と宗祇とである。先づ心敬に於ては

- (1) 昔の歌仙にある人の歌をばいかによむべき物ぞと尋はれば、枯野の薄、有明の月とよみ給へといへり。是はいはぬ所を心にかけ、ひえさびたるかたをさとりしれとなり。境に入はてたる人の句は此風情のみ成べし。されば枯野のすすきといへらん句にも、有明の月ばかりの心にて付る事侍るべし。この修行なき人はたどり侍るべし。<sup>(1)</sup>
- (2) 古賢云、常にけだかく寒き名哥、おなじく秀逸の詩聯句をならべて詠吟修行して、心をさび高くもてと也。<sup>(2)</sup>
- (3) さかひに入はてゝは。ふけさびたるかた最尊なるべし。<sup>(3)</sup>
- (4) 行人さむみやま窓のうち  
捨る身のよそに釣する舟を見て

世をはなれ、遠寺にとちこもれる、窓の間より、寒江の釣の舟などの、行かへるを詠出して、心をすます様など、古詩などに、見え侍れは也、是まで三句は、いさゝかふせさひたる句なれば、他人の目まで、かゝるへきにあらす。<sup>(4)</sup>

(5) 江月

ふけにけりをとせぬ月に水さひ江のたなゝし小舟ひとりなかれて

ひとへに、さひふけたる風躰也、音せぬとは、人のさしすてたる也、ふけたる月に、舟の心とたゝよみ侍る也。<sup>(5)</sup>

等の用例が見出される。此れらの例によつて先づ理解される事は、「さび」の位置が極めて高いものとして、即ち「境に入はてたる人の」「最尊」の句として認められ、又美的理念として明確に認識されてゐる事である。これは庶幾されてはゐるが、俊成に於ても尚一体として認められて居た歌論の「さび」に比して明かな相違を示すものと云ひ

得る。次に俊成等の「さび」が多く姿乃至は駄に於て認められて居たのに対して、例へば「心をさび高くもて也」の如く心に就ても否、寧ろ心敬に於ては心を中心として言はれて居る点、大きな相違と云へよう。即ち心敬は「幽玄」に就ても亦「艶」に就ても「古人の幽玄体と取おけるは心を最用とせしにや。大様の人の心得たるはすがたのやさばみたるなり。心の艶なるには及がたき道なり。人も姿をかいつくるへるは諸人の事なり。心ををさむるは一人なるべし」の如く心を特に尊重した事と一致する傾向として捉へる事が出来よう。然もその「さび」は「ひえさび」として捉へられて居るのであり、此処に歌論のそれとの最も大きな相違を見出すのである。戦乱のそして天災の絶えぬ最も末世的世相に生きた心敬の生活原理、及び其処から見出して来た和歌発想の原理は

- 1、まことに此道は、仰げばいよいよ高く、切ればいよいよ堅しとなれば、猶修行の方ありたくみえ侍る歟、此道は偏に工夫の上のみなるを、拙者なども年久しく傍にて、ほしきまゝに侍しこと、後悔は千度にも過てこそ覺侍れ、工夫修行とて、あながちに境はるかに侍らず、唯艶に情深く、此道より世間の夢中、まぼろしをも悟しり、述懐、恋、旅、無常の句などを、其事になりかへり、その心になりはて、一粒の涙をも、一念の無常をもすゝめ侍らんとめと、偏に心をも沈め人間の色欲をもはなれ、当来の一大事をも悟りしり、思ひいれ侍らむのみなり。<sup>(6)</sup>
- 2、又此の世の無常遷変の理身にとをり、なにの上にも忘ざらん人の作ならでは、誠には感情あるべからず、詞は心の使といへり、げにも只今きえ侍らん此身の不思議を忘れて、有相道理の上のみの作にては。ひとり結構なるも理ならずや、此道の友といへるは偏に情ふかく艶に、誠ある人のみなるべし。<sup>(8)</sup>

の如きものであり、それは深い現実認識から発し、常に無常の世界を感得してのものであるが故に、歌論に於けるそれとは異つて、「ひえさび」とか「ふけさび」とか云はれる如き、さびしさ、あはれさの透徹した世界なのである。

従つて此処に見られる具体的な「さび」の用例(4)・(5)を見ても、現世的なるものの一切を捨て切つた心敬の面影が髣髴と漂ふのである。誠に此等の世界は淋しさと孤独に徹し、無常感の最も深淵なる世界が感性を通して見事に具象化

されたものであつて、此処では俊成の「さび」に見られた存在論的人生のあはれさや郷愁性も尚浪漫的と否定し、更に深く冷い現実の深淵に觸れての、否寧ろ現実的世界の諸想を超えその底をも突き貫けて存する無常感の淋しさ、あはれさが存するのである。しかしながら斯くの如く一度は現世的人間的なるものを厳しく拒否し切るものの、尚その背後には再び人間的な世界を眺めやる情趣が「よそこに釣する舟を見て」とか、「ふけたる月に、舟の心とたたよ侍る也」の中に感得されるのであり其処にこそ単なる仏教的無常觀の具象化とは異つた心敬の苦悩と修行を重ね重ねての後に見られるやさしき心の働きが感得されるのである。それ故に「さび」なる世界は境に入り果てての老年の世界にして初めてよくこなし得るものなのである。

斯かる心敬に於ける「ひえさび」の世界は、「又こほりはかりえんなるはなし。刈田の原などの朝うすこほり。ふりたるひはたの軒などのつらゝ。枯野の草木など。露霜のとちたる風情。おもしろく艶にも侍らすや」の言葉で具体的に説明された冷えたる艶・心の艶に通じ、又その方向としては、心敬の批評語「さむくやせたる」「やせさむく」「さむく」「やせ」「ひえやせ」「やせからび」「ひえはて」「ひえ氷る」「ほそく」「しみこほる」「からび」等と深く関係し「ふとく」「あたたか」等とは対照的なものと言ふことが出来る。

俊成等の歌論に於ける「さび」なる世界の最も重要な性格の一つとして、縹緲性を考へたが、心敬の「さび」にもそれは明確に指摘し得る所である。即ちそれは(1)の例によつても知られる如く「いはぬ所に心をかけ」て初めて感得するものであり、淋しさ、あはれさ、と云つた情緒そのものを指すのではなく、それらが余情となり、内に深く沈潜し醗酵して幽かに漂ふ所の美的情趣として感得されて来るものに他ならないのである。斯かる点は歌論に比して一層明確に理論化してゐるのである。しかしこの余情性、並びに縹緲性は

尊宿の語待し、いづれのみちもおなじ事に待れ共、殊に此道は感情、面影、余情を宗として、いかにもいひ残し、ことわりなき所



に幽玄、哀は有べしと也。歌にも不明体とおも影ばかりをのみよむ、いみじき至極の体なり。ふつとその人一人のわざ成べしと定家卿も委し給へり。兼好法師のいはく、月花をば目にてのみ見るものは、雨のよに思ひあかし、散しをれたる木陰にきて、過にしかたを思ふところ書侍る。誠にえんにふかく覺侍り<sup>(4)</sup>

の用例によつても理解される如く「幽玄」並びに「艶」にも通ずる性格であり、中でもそれは「幽玄」の最も大きな属性であると云ひ得よう。心敬の「幽玄」の世界にも淋しき、「あはれ」さの世界も亦見出せるのであり、「さび」とかなり重なり合ふ面を持つのであるが、而しその用例

(1) 秋の田のかりほの庵の苫をあらみわが衣手は露に濡れつゝ

佗びぬれば今はたおなじ難波なる身を尽してもあはんとぞ思ふ

山里を霧の籬のへだてずは遠万人の袖は見てまし

忘れぬやさは忘けりある事を夢になせとぞいひて別れし<sup>(4)</sup>

(2) 朝はらけ花鶯の面影によはうちかすみ春やきぬらん

夜半の虫声の千種の色ながら花に成行しのめの庭

神な月都の宿も山深み木葉音する夕くれの空

きぬ／＼にのこるはつらき物とたに月をも身をもいつか恨ん<sup>(4)</sup>

(3) 袖をかざすは名のみ笠にて

春日野のうへなる山の春霞

ともにすまんといひしおく山

なき跡にひとりぞむすぶ柴の庵

古里となるまで人の猶すみて

荻ふく風は衣うつなり

風のあとまでさむき夕暮

秋はたゞ人を待つにもうき物を

わかれおもへば涙なりけり

松風もたがいにしへをのこすらん<sup>(4)</sup>

等を先の「やび」の用例と比較して見る時その差はかなり顯著である。殊に和歌に於ては恋の歌が多く、心のあるあ

はれさの情趣が多いのであり、叙景に於ても冷く荒れたる世界より、ほの／＼とし、或はしみじみとした世界である。連歌に於てはさすがにそれ程ではないが尚「さび」の用例に比較すれば、やはり人間的な温かみの多いあはれさが認められるのであり、かなり異なると云へよう。

宗祇の連歌論に於ても

(1) なくや千鳥の水さむきこゑ

舟くだすさよふけ方に月出て

これはさよ衝の跡をしたひたる詞の外はことなる事なし。たゞ一句からのさひて哀なる躰を以。前句によく似会たるなり<sup>(6)</sup>

(2) 月寒しとふらひきます友も哉

野寺のかねの速き秋の夜

詞やす／＼として。心はさひてあはれなる。野寺訪僧帰帶月と云詩をもて付たるなり<sup>(6)</sup>

(3) 初学の時ひえさひたる姿杯こひねかひ給は。あかる事をそかるへし。此姿なとも境に入至極の人の心かくへき道也<sup>(7)</sup>

等の如き「さび」の用例は見出し得るのであるが、既に先学によつても指摘されてゐる如く、宗祇は連歌の世界に於ては最も偉大な足跡を残したけれども、その理論的な面に於ては新しい展開を示しては居らず、従来の連歌論を集成したものに止まる感が深いのである。此処に見られる「さび」なる用例に於ては、心敬程の現世拒否の厳しさ、冷さはなく、柔げられ、丸みを帯びたさびしさ、あはれさであり、「ひえさび」から「さび」の世界へ復帰してゐるとも云へるが、而し根本的な所では同じであり、心敬のそれからの展開を見せたとは云へないのである。

連歌論に於ける「さび」なる理念はこの二人に明確に見られるのであるが、それは歌論の「さび」に比して、より強く心に於ける「さび」が強調せられ、あはれさ、さびしさの世界が一段と深まりを見せ、無常感に裏打ちされた窮極の相が「ひえさび」として把へられてゐるのであり、且つその姿に於ても、面影・余情を通して纏綿性が明確に認

識されてゐるのである。そしてこの背後に存する内省的な変らざる存在の眞実追究への思慕はより一層深められたものとなつてゐるのである。斯くして「さび」の理念は一風体としての位置から究極の最高の位置へと引上げられてゐるのであり、此処に連歌論に於ける「さび」の歌論からの鮮かな展開が認められるのである。そして又この心敬に於ける「さび」が高悟帰俗として再び現世的、人間的なるものを内に取り入れて来る時「さび」の新しい展開、即ち近世化が見出されて来るとも云へるのではなからうか。

- 註(1) 心敬私語 日本歌学大系 第五卷 三三四頁  
 (2) 所々返答 岩波文庫本 連歌論集上 三一九頁  
 (3) 老のくりごと 群書類従 卷第三百五  
 (4) 芝艸 △文明本▽ 心敬集 論集 四二頁、  
 尚この文は明応本では「是迄三句は、そはみ心を、えがたき句なれば」とあり、さびの言葉は用ゐてゐない。  
 (5) 百首和歌 △寛正本▽ 心敬 論集 三三一頁  
 (6) 心敬私語 日本歌学大系 第五卷 二八三頁  
 (7) 所々返答 岩波文庫本 連歌論集上 三一五頁  
 (8) 岩 橋 // 三三五頁  
 (9) 心敬僧都日登理言、続群書類従 第卷四百九十七  
 (10) 拙稿 日本文芸研究 第十三卷 第一号 △連歌論に於ける艶の本質▽ を参照されたい。  
 (11) 心敬私語 日本歌学大系 第五卷 三二三頁  
 (12) // // 二八三頁 一首置きに引用した。  
 (13) 心敬僧都 十鉢和歌 続群書類従 卷第四百三  
 (14) 心敬私語 日本歌学大系 第五卷 三〇六頁  
 (15) 花能万賀喜 続群書類従 卷第四百九十五  
 (16) // //

歌論・連歌論の「さび」

四六

(17)

白髮集

続群書類従

卷第四百九十六

近世に於ける「さび」なる理念に就ては近く日本文芸研究に於て考察する予定である――

――関西学院大学文学部専任講師――